金正日国防委員長の人民観

朝鮮民主主義人民共和国
外国文出版社
チュチェ113(2024)

金正日国防委員長の人民観

朝鮮民主主義人民共和国
外国文出版社
チュチェ113(2024)

まえがき

朝鮮人民が偉大な指導者金正日（キムジョンイル）国防委員長をたたえる呼称の中には、人民の指導者という呼称もある。

人民の指導者、この呼称には祖国の富強・発展と人民の幸福のために一生をささげた国防委員長の人生観と人民観が集約されている。

金正日国防委員長の人民観はすなわち人民に対する愛情と献身的奉仕であり、これはすなわち国防委員長の革命持論であり、生涯の座右の銘であった。

国防委員長は常に自らを勤労する人民の息子と称し、一生を人民という二文字と結び付けて生きてきた。

人民への絶対的な崇拝と愛情を人生観とし、人民の要求と意思を革命と建設の絶対的な基準にした方、人民大衆第一主義を政治信条とし、人民の力と知恵に依拠して万事を解決した方、人民の幸福を第一の活動原則とした方がまさに金正日国防委員長であった。

そのような方であったがゆえに、人民の運命を守るためなら、波荒れる海上も千尋の崖の道もためらうことがなかったし、遠い外国訪問の道で何か珍しい製品を一つ見ても愛する人民を先に考えた。

それゆえ朝鮮人民は、ひたすら人民のためにあらゆる険しい道をも踏み分け、集約して顧みれば人民という二文字しか残らない国防委員長の一生について、人民の幸福と自らの生涯を引き換えた人民の指導者の一生であると切々と謳っているのである。

人民に尽くした国防委員長の偉大な生涯に残されたエピソードの一部を通じて、偉大な指導者金正日国防委員長の崇高な偉人像を振り返っている。

目　次

1. 人民は天

黄金で堤防を築くことがあっても

1957年6月のある日、金日成(キムイルソン)主席に随行して新渓(シンゲ)郡海浦(ヘポ)里を訪れた金正日国防委員長は、地元の住民の飲料水の問題を解決する方途を見出すためにミル原のある山頂に上がった。

ミル台地はひどい水不足で飲料水にこと欠いていたところで、旅人に一碗のご飯はもてなしても、水は一どんぶりも出せなかったという土地であった。

しばらくの間、周りの山容を注意深く見やっていた国防委員長は谷間を下った。

山頂から見下ろすときは林が生い茂っていて大きな水源があるようだったが、いざ降りて見ると、細い水の流れがあるのみであった。

非常に残念がった国防委員長は、幹部たちを見回して、水量はいくらもならない、金日成同志が述べたように新渓のミル台地は水不足が問題だ、と言った。

再び険しい谷間を上った国防委員長は、向こうの谷間を注意深く見た。

その谷間にはいつもたくさんの水が流れるという幹部の話を聞き、しばらく周辺を注意深く見回していた金日成

主席は、二つの谷間の水を全て溜めるために、谷間の下方に貯水池をつくるよう指示した。

国防委員長は農場の幹部に、金日成同志の教え通り二つの谷間から流れ落ちる水が合流するあの下をせき止めると大きな貯水池になるであろう、貯水池が建設されれば上水道の工事から始めるべきだと言った。

農場の幹部は大きく驚いた。

実際、ミル原の農民たちは渇水期には2里も離れた遠い所へ行って水を汲んできて使っていた。そうしながらも彼らは、自分たちのなめている飲料水不足の苦労よりも農作物が日照りに枯れるのをもっともどかしく思っていた。

それでその幹部は、貯水池が建設されれば畑の灌漑から始めるべきだと考えていた。

ところが、国防委員長は上水道の工事を先行させて人民の飲料水の問題から解決すべきだと念を押した。

国防委員長は彼に、ミル地区に上水道の工事をするには資材と資金がどれほどかかるのかと尋ねた。

幹部が報告した数字は実に膨大なものであった。

それもそのはず、広々としたミル地区の全ての住宅に水道を引くためには、労働力もさることながら莫大な量の水道管が必要であった。

ところが、当時の国の鋼鉄事情は極めて緊張していた。

幹部の説明を慎重に聞いてちょっと考えていた国防委員長はきっぱりと言った。

——10里ではなく、100里、いや、1000里に鉄管を埋めるようなことがあっても、ミル地区の水道化を実現しなければなりません。黄金で堤防を築くようなことがあっても、貯水池の工事を必ず行わなければなりません。

国防委員長は続けて、ミル原の住民が2〜3里も離れたところから水を汲んでくるというのだから、水のための苦労はいかに大きいことだろうか、今5カ年人民経済発展計画の初年度の課題を遂行するために至るところで要求されるのは資材と資金である、国の状況が極めて困難なので、われわれは刻苦欠乏に耐えながら勤倹節約しているが、ミル原の人々に水を解決してやるためには惜しむべきものはないと言った。

こうして新渓谷山（コクサン）地区には、永遠に渇くことのない新谷（シンゴク）貯水池がつくられ、家ごとに清い水道の水が流れ込むようになった。

人民に対する評価

1958年4月のある夜、金正日国防委員長は朝鮮民主青年同盟中央委員会のある女性幹部に会って、李寿福(リスボク)英雄について意義深い話を交わした。

李寿福英雄は去る祖国解放戦争(1950・6・25〜1953・7・27)時期、1211高地戦闘で火を吐く敵のトーチカを胸で塞ぎ、戦闘の勝利を保障して戦死した。

学校の民青委員たちと共に李寿福英雄の故郷を訪ねたことのある国防委員長は、その女性幹部に、李寿福英雄は真の愛国者であったと語った。

英雄の姿を思い浮かべるかのようにしばらく物思いにふけっていた国防委員長は、私が李寿福英雄を忘れないでいるのは彼が一身をなげうって部隊の突撃路を開いたということもあるが、重要なのは一つしかない祖国のために掛け替えのない命をためらうことなくささげて戦ったからだと言った。

国防委員長は彼女に向かって、李寿福英雄は金日成同志が取り戻してくださったわが祖国と、金日成同志を慈父として戴いて生き戦うわが人民を限りなく愛した、彼の心の中には金日成同志と祖国、祖国の輝かしい未来しかなかった、われわれが李寿福英雄をあれほど高く評価する理由は

まさにここにある、と言った。

　そして、去る戦争と戦後復興建設期を通じて数多くの青年と人民が李寿福英雄のような思想・感情を持っているということを確信するようになり、このような青年、このような人民を持っているわが祖国は不敗であるという固い信念を持つようになったと語った。

　国防委員長は、この頃一部の人はわが人民の文化技術水準がどうの、進取性がどうのと言っているが、私はそのような人たちに朝鮮民族は最も偉大な民族だと言ってやりたいとして語を継いだ。

　――普通、人類史を闘争の歴史、創造の歴史と言っているが、民族の力はまさに旧社会を変革するための階級闘争と自然を征服するための闘争に集中的に現れる。わが人民は去る戦争でアメリカ帝国主義を打ち砕き、偉大な勝利を収めた。わが人民は国が解放されてから5年しかならず、共和国が創建されてからは2年しかならなかったが、世界「最強」を誇っていたアメリカ帝国主義を打ち砕き、祖国の自由と独立を誇り高く守り抜いた。これは人類史にかつてなかった奇跡である。わが人民は戦争時期にアメリカを頭とする帝国主義連合勢力を打ち負かすことによって全世界の人々の驚嘆を呼び起こし、彼らから尊敬される偉大な民族となった。……

不敗の祖国、偉大な民族という国防委員長の言葉に女性幹部は深く感動させられた。

知識も人民のために

1961年5月のある日、臥山洞(ワサン)—竜城(リョンソン)間の道路拡張工事に参加した金正日国防委員長は、大学生たちに次のように語った。

——われわれが金日成同志の教示を受けて臥山洞—竜城間の道路拡張工事に参加してからもう10余日が過ぎた。この間、全ての大学生建設者が力と知恵を尽くして働いたために工事が多く進み、今や新しく拡張される道路がその姿を現し始めた。

国防委員長は浅黒く日焼けした大学生たちの顔を見つめながら言葉を継いだ。

——周辺の人民はわれわれの働きぶりを見て大学生たちが実に誠実に働いていると称賛しています。人民の称賛を受け、人民から愛されることよりもっと立派なことはありません。

そして、以前人々は大学生を指して労働が何かも知らない「もちぐされ文庫」とばかり考えてきた、実際、以前の大学生はほとんどが金持ちの子で労働をしてみたことがな

く、贅沢に暮らしたので、労働が何かも知らなかった、彼らは労働が社会の全ての富を創造し、この世で勤労者が最も立派な人であり尊敬されるべき人だということを知らなかった、労働は社会の全ての富を創造する源である、社会主義社会でも人々は労働をしなければならない、人民がわれわれを称賛するのも、大学生が労働に誠実で、何ごとであれどしどしやり遂げるからだ、と言った。

国防委員長の称賛の言葉にみんなの顔は明るくなった。

国防委員長は慎重な面持ちで、金日成同志は、昔は書堂で『論語』や『孟子』をすっかり読んでも手紙もまともに書けない人がいたとして、役に立たない知識は無用の長物だと述べている、知識のための知識、勤労人民大衆に奉仕できない知識はわれわれに必要がない、と言って、特別に力を込めて強調した。

——われわれは人民のための知識を身につけなければならず、自分の手で機械を扱い、住宅も建て、農作業もできる大学生にならなければなりません。そうしてこそ、人民に愛され、人民に忠実に奉仕することができます。

大学生たちは国防委員長の言葉を胸深く刻み付けた。

人民の財産を大切にせよ

1961年5月のある日、臥山洞―竜城間の道路拡張工事に参加した大学生たちは、休息のひとときを送っていた。

金正日国防委員長は「人民に愛される大学生になるためには、国と人民の財産を大切にしなければなりません」と言い、次のような話を聞かせた。

その日の午前、一人の老婆が地中から出た石炭を持っていこうと、バケツを手にして作業場に現れた。

ところが、一部の学生が作業にじゃまになるとして老婆を引き止め、石炭を埋めてしまおうとした。

それを目撃した国防委員長は、老婆の善行から国の財産を大切にする美しい心の内を推し量り、学生たちの間違った行動を謝りもするつもりで、自ら石炭をバケツに入れて、老婆の後をついていった。

国防委員長は恐縮しきっている老婆に、私も勤労する人民の息子であるとし、家に石炭が切れているのかと尋ねた。

老婆は、石炭は毎月供給されるので焚き物に困ってはいないが、地中に埋められるのがもったいない、その石炭を掘って使って、それだけ石炭の供給を受けないと、国に少しでも助けになるのではないかと言った。

国防委員長はそのような事実を学生たちに話して、私はお婆さんの言葉を聞いて多くのことを考えさせられた、われわれは国と人民の財産を大切にし、国に少しでも助けになろうとするそのお婆さんの善行に見習わなければならない、大学生は国と人民の財産の貴さを自覚し、大学時代からそれをきちんと管理・利用することを習性化、生活化すべきである、と述べた。

国防委員長はふと、夜業組で働く一人の級友の名前を呼んだ。

彼が立ち上がると、国防委員長は、この前夜業組の一人が主人家のシャベル柄を折ってしまったので、新しいものでシャベルの柄を合わせて返すようにと言ったが、どうなったのかと尋ねた。

「新しいシャベルの柄をよく手入れして主人に返したら、そこのお爺さんの態度がすっかりよくなりました」

国防委員長は満足して、それを見ろ、皆さんは一つのシャベル柄をもってお爺さんのやさしい心を得たが、実際これは、1000個のシャベル柄とも代えられない貴重なものだ、と言って語を継いだ。

——数日前、一部の大学生は、工事現場の周辺にある老人の家で昼食を取って庭の花壇の手入れもし、垣根の下の溝もさらって大きな石を掘っていた途中シャベル

の柄を折ってしまったものをそのまま返そうとしたが、これも深刻に反省すべきことである。もちろん主人は自分の家の仕事をしてシャベル柄を折ったのだから、そのまま返しても悪くは思わなかったであろう。しかし、われわれは工具倉庫へ行ってよいシャベル柄を選んで再び合わせ、小刀でよく手入れした後に主人に返すようにした。われわれは人民の財産に対していささかも損を与えてはならない。……

国防委員長は、人民に愛される大学生になるには、一にも、二にも、三にも、金日成同志の高邁な徳性に見習うのが重要であるとして、次のような話をした。

1933年初、部隊を率いて涼水泉子に来た金日成同志は、豆満江（トゥマン）畔のある老人の家にしばらく泊まりながら、毎朝川に出て斧で氷を割り、水を汲んできた。

ところが、氷を割る途中で斧の柄が折れて、斧が氷の穴に落ちてしまった。

金日成同志は、斧を捜そうと手を尽くしたが、ついに捜すことができず、主人に斧代として十分な償いをし、重ねて詫びた。

金日成同志は失った斧代として十分な償いをしたにもかかわらず、老人の使い慣れた斧を捜せなかったことを30年近く過ぎた今日に至っても忘れずにいた。

そして、一昨年の夏、中国東北地方に派遣された抗日武装闘争戦跡踏査団と共に行くある闘士に、必ず涼水泉子の老人の家を訪ねて斧を捜せなかったことについて今一度詫びてくれと頼んだ。

大学生たちはあまりにも驚くべき事実に接して大きな感動を受けた。

国防委員長は語を継いだ。

――実に金日成同志は、人民のために生涯をささげる人民の領袖です。金日成同志によって教育され、育成された抗日革命闘士は、人民の生命・財産を命を賭して守って戦い、いささかの損害も与えませんでした。

われわれは金日成同志の人民のためを思う高邁な徳性に見習わなければなりません。そうして、自分一個人の利益よりも人民の利益をもっと大事にし、自分自身を考える前に人民を先に思う真の人民の大学生にならなければなりません。

国防委員長の懇切な言葉を胸に刻み付けながら、学生たちは作業を始めた。

空気の新鮮な化学工場

1965年7月のある日、金正日国防委員長がある化学工場を視察したときのことである。

工場を見て回った後、そこの幹部たちと席を共にして生産問題を討議していた国防委員長は、ふと、窓の方に目をやったまましばらく無言でいた。

窓の外は真夏の猛暑でひどく蒸し暑かった。

国防委員長は工場のある幹部に、カーバイドを生産する労働者たちに何を供給しているのかと尋ねた。朝方、工場を見て回る際、高熱を噴き出す炉の前で汗びっしょりになって働いていた労働者たちの姿が浮かんで尋ねたのである。

労働保護物資と栄養剤を供給するという報告を受けた国防委員長は、慎重な口調で、カーバイドを生産する労働者たちには肉と食用油をたくさん供給すべきである、生産を上げるには労働者たちの生活に関心を払わなければならない、と語った。

そして、再び窓の外に目をやり、誰にともなく空気が悪いではないかと聞いた。

国防委員長は、相変わらず煙突から吹き出される煙を眺めながら尋ねたのであった。

そのときになってはじめて幹部たちは、国防委員長がなぜ窓から視線を放せずにいるかがやっと分かったが、誰もすぐ答えることができなかった。

そのとき工場では、生産にばかり汲々としながら煙突から出る灰粉を取り除く問題は後回しにし、労働者たちの生活と健康にも深い関心を払っていなかった。

はっきり答えられない幹部たちを見回していた国防委員長は、重い語調で言った。

——煙突から出る灰粉を処理できなければ空気が悪くなり、労働者の健康にも支障を与えます。……

そして、煙突から出る灰粉を取り除くのは技術的に容易に解決できる問題なのに、まだ何の対策も講じていないと指摘した。

ちょっと口をつぐんでいた国防委員長は、工場の前に鴨緑江（アムロク）が流れ、裏には山があるので景色もよいところだ、空気をきれいにし、木をたくさん植えて濃い緑に覆われるようにすれば、空気の新鮮な化学工場になるだろう、化学工場を公園のように立派に整備しなければならない、と強調した。

その後、化学工場は公園のように整えられ、澄んだ新鮮な空気は労働者たちを楽しませた。

親しみ深い呼び名

1966年7月のある日、金正日国防委員長は平壌(ピョンヤン)紡織機械工場を訪れた。

大学時代の生産実習期間に親しくなった労働者たち一人一人が印象深く思い出されると言って、忙しい現地指導の道で時間を割いて訪れたのであった。

ところが、歓声を上げて迎えてくれるはずの労働者たちの姿は見えなかった。日曜日なので工場では労働者たちを休ませたのである。

国防委員長はずいぶん残念そうな面持ちでゆっくり足を運び、工具職場の特につやつやと光る機械の前で立ち止った。

「この機械は私が扱っていた26号旋盤です」

国防委員長は、この26号旋盤と共に送った労働生活の日々を一生忘れることができないと言い、そのときを振り返るかのようにしばらく口をつぐんでいた。

そのときだった。

急に出入り口のドアが開けられ、一人の男があたふたと駆けつけてきて国防委員長にあいさつをした。工具職場の職場長であった。

「あ、久しぶりですね」

国防委員長は顔をほころばせて彼の両手を取った。

お元気だったのか、休日なのになぜ出たのかとあいさつを交わしていると、もう一人が駆けつけてきた。

彼のあいさつも受けた国防委員長は、私は生産実習を終えて帰ってからも皆さんのことがたびたび思い出されたが、なかなか時間を割くことができず、今日このようにやって来たとしてこう尋ねた。

「わが作業班員たちはみんなお変わりありませんか」

国防委員長は、自分が生産実習を行った作業班をわが作業班と親しく呼び、作業班員の名前を一人一人呼んでみた。

国防委員長は情のこもった視線で職場のあちこちを見て回った。

作業班の更衣室と職場宣伝室、裏庭の花壇とバレーボールコート……。

国防委員長は深い感慨にひたって語った。

——私たちはここで作業の指示も受け、作業総括も行い、初級活動家の協議会を数回も開いた。お昼時間にはこの机を取り囲んで座って食事をした。みんなが集まって一緒に食事をすれば食欲も湧き、とても面白い。昔、金持ちが螺鈿の膳を前にしてご馳走に舌づつみを打ったとしても、私たちのそのような生活、そのような面白味は味わえなかったであろう。みんなが集まって食事をすれば、人民

が何を食べ、困っているのは何かも知ることができた。夕方には歌謡の普及や芸術小品の公演も行い、ときたまピクニックにも出かけた。このバレーボールコートはもともと空地だったが、私たちが来て作ったものである。ここで毎日、昼食を終えてバレーボールの試合を行ったりした。私がたびたび審判を見たが、試合はとても白熱した。バレーボールの試合が終わると水道場へ行って洗面をし、気勢を上げて仕事に取り掛かった。……

忘れられない日々、忘れられない人たちへの追憶であった。

このときある幹部が、工場では金正日同志をいつも工具職場の従業員と考えていると言った。

すると国防委員長は豪快に笑い、こう語った。

――この工場では私をいつも工具職場の従業員と考えているとのことですが、そうして見ると私もこの工場の主人です。私は機械作業班の堂々たる旋盤工です。私が毎日出勤して旋盤を回すことはできなくても、心はいつも皆さんと共にあります。

長くない生産実習の日々に労働者階級の革命性、献身性、忠誠心を目の当たりにしながら指導者としての品格を備えた国防委員長の心の中には、常に労働者階級、勤労する人民があった。

最も尊敬すべき宝

1975年8月のある日のことである。

中央指揮部に緊急通知が届いた。

ある炭鉱で3人の炭鉱夫が思いがけない事故で瀕死の重傷を負ったという通報であった。

全身3度の火傷、完全ショックの状態、蘇生不可能……。

その日の夜、金正日国防委員長は電話で党中央委員会のある責任幹部を呼んだ。

「上和（サンファ）青年炭鉱で事故が起き、炭鉱夫の生命が危ういということを知っていますか」

「はい、報告を受けました」

「……なぜ私にすぐ報告しなかったのですか」

「ご心配なさるかと思って……」

「……それは正気で言っていることですか。炭鉱夫の命が危ないというのに、私が心配するしないが問題になりますか。炭鉱夫の命を救うことより重要なことがどこにあるというのですか」

「申し訳ありません」

「それでどんな対策を立てたのですか」

「道党に電話で対策を立てるよう強調しました」

怒りのあまりしばらく口もきかなかった国防委員長は厳しく叱責した。

——人民はわが党を母なる党と呼んで慕っているのに、あなたたちに一体母親らしい気持ちが少しでもあるのか。……

幹部は顔を上げることもできなかった。

国防委員長は即座に、至急炭鉱夫たちを蘇生させる非常対策を立てるべきだとして、有能な医師と非常薬品を全て動員し、夜は更けたが今すぐ飛行機を飛ばすようにと指示した。

「分かりました」

しかし、あいにくの豪雨のため民間機は飛ぶことができなかった。

国防委員長は直ちに軍用機を飛ばすよう命じた。

こうして軍用機が夜空に飛び立った。

その後、患者たちの体のむくみが取れず苦しんでいるという報告を受けた国防委員長は、電話で党中央委員会のある責任幹部を呼び、心配してこう言った。

——患者の体がむくんでいると聞いたが、むくみを取るにはスイカとビールがよいそうだ。彼らにスイカとビールを送り届けよう。ヘリコプターを飛ばすことにしよう。ヘリコプターはこんな場合に飛ばさなくていつ飛ばすものか。ヘリコプターで医薬品と共にスイカとビールを今

日中に送り届けなさい。……

患者たちは回復期に入った。

国防委員長は彼らを全快させるためには、近代的な医療設備を備えた大きな病院に移して集中的な治療を施す必要があるとし、再びヘリコプターを差し向けるよう指示した。

再びヘリコプターが空を飛んだ。

3人の炭鉱夫は奇跡的に蘇生した。

国防委員長はほっとして仕事に着手した。

人民的な観点

1980年1月のある日、金正日国防委員長は幹部たちに、平壌にアイススケートリンクを建設する課題を与えた。

——今後平壌市にスケート競技場まで建設すれば、金日成同志が指示した対象を全て建設することになります。……

……平壌に建設するスケート競技場は国際競技も行えるようにしなければなりません。

スケート競技場は屋根をふき、冬にも夏にも利用できるものにするのがよいでしょう。

設計師たちは国防委員長の意図を体し、知恵を集めてスケート帽とスケートの刃をかたどったユニークな形式の設計図を作成した。

ある日、設計図を検討していた国防委員長は、なぜ6月から10月まではアイススケートリンクを運営しないことにしたのかと尋ねた。

幹部たちは、夏季に温度が非常に高くなった室内の空気を冷やすには、リンクの冷凍設備より値段の高い冷却設備が必要だから、やむを得ず、暑い季節にはアイススケートリンクを運営しないことにしたと答えた。

　すると国防委員長は、1年に5カ月間も人民が見物できないようになれば建設する意味がない、必要な冷却設備を全て解決してやるから、年中アイススケートリンクを引き続き運営できるよう、設計を作り直すようにと言った。

　そして、室内の古い空気を人工的に換えるための設備を予見していないのにも気づき、このように言った。

　――競技場内に汚染した空気が少しでもそのまま残るようにしてはならない。空気を全部抜いて100パーセント新しい空気を入れ換えるようにすべきである。資本家には工事費や運営費が問題になるであろうが、人民のためのわれわれの建設事業では金が問題ではない。人民的な観点に立って設計をつくり直すべきである。

　結局、外国のものを基準としたアイススケートリンクの設計図は否決された。

　設計師たちは、人民的な観点、言い換えれば人民に贈るアイススケートリンクは最上のものでなければならないという観点に立って再び設計した。

　そうして、四季を通じて運営しながらも常に清澄な空気が溢れるアイススケートリンクが普通江畔に建てられるようになった。

消えたじゅうたんと新しく掛けられたハンガー

1980年1月のある日、金正日国防委員長は開院を前にした蒼光院（チャングァン）を視察した。

中央ホールに入った国防委員長は、満足した面持ちでホールを見回し、2階に上がった。

陽光溢れる2階の大衆浴場の休憩室には、サイクリング器材をはじめとする近代的な運動器具が並んでいて人々の目を引いた。

それらを眺める国防委員長の顔に微笑が浮かんだ。

幹部たちの顔にも喜びと誇りがみなぎっていた。

ところが、運動器具の一つ一つに目をやっていた国防委員長は、休憩室の床に敷いたじゅうたんを見て残念そうな面持ちになった。

幹部たちはじゅうたんのあちこちに目をこらした。

そのじゅうたんはそれまでのじゅうたんの中で一番よいと言われる高級じゅうたんなので、いくら見ても非の打ち所がなかった。

国防委員長は、大衆浴場の休憩室にじゅうたんを敷いたのは間違っている、じゅうたんはほこりが多くつき、湿気

を受ければ臭いがするからよくないと言った。

幹部たちは、休憩室に高級じゅうたんを敷いておけばより明るく、気品があるように見えるであろうとばかり考え、それが衛生上よいか、また人民に不便を与えるのではないかということについては関心を払えなかったので、顔を赤らめた。

更衣室に立ち寄った国防委員長は、今度はロッカーの中をのぞき込んで言った。

「ロッカーの中にプラスチック製のハンガーを一つや二つぐらい掛けておけばよいでしょう」

幹部たちは、どの商店に行っても容易に手に入れることができ、家庭でも朝夕衣服を着替えるときに先に手にするハンガーがロッカーには必ず必要だということに気づかなかった自責の念に駆られた。

その後、大衆浴場の休憩室に敷いたじゅうたんは消えてしまい、ロッカーにはハンガーが新しく掛けられた。

人民のための仕事

1983年3月のある日、幹部たちに会った金正日国防委員長は、人民生活に深い関心を払うよう改めて強調した。

国防委員長は、わが党は人民の生活向上をその活動の最高原則とし、人民の生活を向上させるために常に深い関心を払ってきた、革命発展の各時期、各段階に人民生活を向上させるための方途を示した、として語を継いだ。

——人民生活を向上させる上で最も重要なことは、食の問題を円滑に解決することである。金日成同志が数回にわたって述べていることだが、衣服や家などはなくても我慢できるが、空腹とは妥協できない。……

続けて、副食物をはじめとするいろいろな食品をたくさん売ってやれば、人民の食生活をさらに豊かにすることができると言った国防委員長は、平壌市内に新しく開店した水産物直売店の運営状況について語った。

その水産物直売店は、国防委員長の発起によって建設された商店であった。

国防委員長は現地へ出向いて敷地を定め、東海と西海の漁港から生鮮な魚を適時に運んでくるよう自ら直送体系を確立し、それに必要な輸送手段も全て解決した。そして結

婚式をはじめ祝い事のある家庭に先に売ってやるよう、販売形式や方法に至るまで具体的に教えた。

そうして、水産物直売店は鮮度のよいホッケとカレイ、タコとサワラなど海産の各種の魚が入荷し、毎日首都の住民で賑わっていた。

国防委員長は感動した顔の幹部たちを見回して語を継いだ。

「……西将（ソジャン）洞に水産物直売店を建設したのは金を儲けるためではありません。われわれはどんな仕事をしても、人民のためのことをしなければなりません。幹部たちが人民のための仕事を多くしてこそ、人民が心から党に従うようになります」

そして、このような直売店を市内により多く建設するよう課題を与えた。

政治とは何か

中国マカオのある貿易公司の女性総経理は、合弁のために数回にわたって朝鮮を訪問した。

1988年2月20日は合弁会社が運営する慶興（キョンフン）商店が開店し、彼女にとって喜ばしい日であった。

ところが、この日彼女は思いがけない大きな栄光に浴した。金正日国防委員長が慶興商店にも立ち寄ったのである。

国防委員長は丁重にあいさつをする彼女に答礼し、合弁商店の開店を祝った。

そして、商店の各コーナーを巡り、商店の運営策についての具体的な説明を受けた国防委員長は、今後とも商店の内装をさらに充実させ、色とりどりの商品を仕入れて売ればよいだろうと強調し、随員たちに向かってこう言った。

——今後慶興商店がマカオの天明貿易公司との合弁で上げる利益金は平壌市民の生活の向上に振り向けようと思います。

（商店を見て回りながらも始終人民のことを思っておられる！）

既に数回も国防委員長にお会いしたことのある彼女は、国防委員長の人民への愛がどれほど大きくて熱いものかを

よく知っていたが、再び受けた感動はより衝撃的なものであった。

国防委員長は語を継いだ。

——やがて光復（クァンボク）通りに建つ合弁料理店は、わが国のお金を取って運営することになるので、利益はほとんど期待できません。そこから利益金を得ようと考えるべきではありません。

資本主義的な考え方に慣れていた総経理はもっと驚いた。

彼女にはどうしても理解がいかなかった。

国防委員長は、総経理の心中を推し量ったかのように、合弁料理店が利益を上げようが上げまいが、それにはお構いなく、天明貿易公司には別途に利益金を配当すればよいだろう、と言った。

総経理は何が何だか分からず困惑していた。

料理店から利益金が得られないのに、自分の貿易公司に利益金を配当するとは、結局国家が損をするということを意味するのではないか。この世に実に不可解な国もあるものだ。

彼女の考えは深くなるばかりだった。

政治とは何か。

弱肉強食の法則がまかり通る社会で生きてきた彼女にとって、政治とは「富益富」「貧益貧」を産む社会悪の温床であり、彼女が見た政治家というものは等しく市井の俗物であった。

しかし朝鮮は違う。

チュチェ思想の祖国、人民大衆中心の国である社会主義朝鮮において政治はすなわち人民に尽くすことであり、国家の最高活動原則も人民の福祉増進である。従って、そのためなら国家が損をするようなことがあっても利益金などは考えない。

全てを人民の志向と要求、利益に服従させ、それを基準にして政策を施す政治、まさにこれが政治の中でも最も真の政治なのである。

このようなことを考えると、彼女は、あたかも暗黒の奈落から光明の楽園へ上り、最も美しい理想郷を見たような恍惚感にひたった。

国防委員長は彼女にまたお会いしよう、困ったことができたらいつでも訪ねてくるようにと言い、商店を後にした。

彼女は国防委員長を見送りながら、われ知らず小さな声でつぶやいた。

（人民のための政治！……）

歌謡も人民のために

金正日国防委員長が舞台・映画芸能人の総合公演を観覧した1988年3月のある日であった。

公演が終わると作品が総体的によくできているとたたえた国防委員長は、ある芸術団の合唱に対しては批判をした。

——専門の歌手さえ歌いにくい歌詞を、そうでない人たちがどう正確にこなしえようか。歌は誰もがたやすく歌えるよう通俗性があり、人民性がなければならない。どこかが鳴るような感じのする合唱は専門の歌手のための合唱であり、人民大衆向きの合唱だとは言えない。私は人民が楽しく歌う歌を好んでおり、専門の歌手のみが好むような歌は好きでない。

自責の念に駆られている幹部と創作家、芸能人を見回しながら国防委員長は語をついだ。

——たとえ人民俳優の歌であっても、人民がその歌を広く受け入れないと、国宝的価値のある作品だとは言えない。人民の心を奮い立たせる歌であってはじめて真に革命的で人民的な歌だと言えるのだ。人民大衆は眼中になく、わが作品のみを絶対視する観点を捨てなければならない。……

幹部と創作家は、人民が受け入れてこそ国宝的価値のある作品だという新しい定式化に接して胸を躍らせた。

国防委員長はチョンリマ大高揚期に作られたある歌を例に挙げて、その歌は当時だけでなく現在も大きな生命力を発揮しているとして、こう言った。

——文学・芸術部門の創作家や芸能人は自分のことばかり考えず、全ての党員と勤労者のことを考え、祖国と人民のことを念頭に入れるべきである。

この日、芸術団体の幹部や創作家たちは歌も人民のために作り、真の芸術を創造するためには祖国と人民に対する愛の精神を持たなければならないということを胸深く刻み込んだ。

肉盛りチェンバン麺

1999年11月のある日。

この日、幹部たちと席を共にした金正日国防委員長は、公共給食部門で民族料理を上手に作って人民に提供する課題を与える途中、ふと、オブクチェンバン麺を話題にした。

幹部たちはみな驚いた。

オブクチェンバン麺というものは、牛1頭から数キログラムしか得られないオブク肉(牛の肋骨下部の腹部肉で、やわらかく味がよいとされている)を具にしたチェンバン麺であり、昔、宮中の王族だけが食べたという料理であった。

まだ国の経済状況が困難なときなのに、オブクチェンバン麺を作って一般人に供するというのは到底不可能なことであった。

国防委員長は幹部の胸中を察したかのように、オブク肉の代わりに鶏肉をチェンバン麺の具にするのがよかろう、玉流館(オンリュ)で鶏肉をもってチェンバン麺を作って人民に売るべきだとして、このように語った。

——鶏肉をもって作るチェンバン麺に肉盛りチェンバン麺という名を付けて売れば人民が喜ぶでしょう。

そして、党が鶏肉問題を解決することを決心し、近代的

な養鶏工場を多く建設するようにしたので、それらの工場で生産される鶏肉をもってチェンバン麺を作って人民に売ることができると確信に満ちて語った。

国防委員長は幹部たちを見回しながら、新しく建設する養鶏工場で生産される鶏は大きいので、一羽をもっていくつもの肉盛りチェンバン麺が作れるだろう、肉盛りチェンバン麺には肉をたくさん盛るべきだとし、今玉流館では冷麺一杯の値段がいくらなのかと尋ねた。

幹部の返答を聞いた国防委員長はこう言った。

——私が言った通り肉盛りチェンバン麺をうまく作って該当の幹部たちに試食させてから、玉流館でその通り作って人民に売るべきである。肉盛りチェンバン麺は最初から質を保障しなければならない。……

その後、玉流館ではオブクチェンバン麺に劣らない肉盛りチェンバン麺を誠意をこめて作って人民に供するようになった。

誕生日にも人民を思って

2002年の民族最大のめでたい2月の祝日が過ぎたばかりのある日、幾人かの幹部が金正日国防委員長に呼ばれた。

ところが、国防委員長に呼ばれて彼らが行った所は、首都から遠く離れた白頭(ペクトゥ)山麓であった。とどのつまり、国防委員長はそこで誕生日を送ったのである。

「遠い所をご苦労でした」

幹部たちと温かくあいさつを交わした国防委員長は、今回、自分が誕生祝いをせず、白頭山地区に来て現地視察をしていることをあなたたちが残念がるのではと思って、共に話しでも交わすつもりで来てもらったと語った。

幹部たちを部屋に請じ入れた国防委員長は、彼らの緊張をほぐそうと気を配りながら、わが人民と同志たちは今年の2月16日を大きく慶祝しようとしたとし、静かに語をついだ。

「しかし私は、人民を休息させるためにできるだけ国家的に大きな行事は行わないようにしました。そして、私が平壌にいると幹部たちがあれこれと気を使うだろうと思って、誰にも知らせずに数日前から白頭山に来て仕事をしています」

4月の祝日(金日成主席の誕生日)ごとに歌と踊り、花の中

で人民が楽しく過ごすようにし、静かに地方現地指導の道を歩み続けた金日成主席が思い浮かんで幹部たちは熱い涙をこぼした。

人民を心に抱いて

2002年8月のある日。

幹部たちと席を共にした金正日国防委員長は、わが人民は実に素晴らしい人民であるとし、今一度人民を高く押し立ててくれた。

2日前、金正日国防委員長は、金日成賞受賞作品である大マスゲーム・芸術公演『アリラン』の最終公演を観て大きな衝撃を受けたのである。

その日、国防委員長が観覧席に姿を現すと、全ての出演者と観客は国防委員長を熱烈に歓迎した。

指導者と人民が一つの思想・意志で固く結集したチュチェ朝鮮の一心団結、偉大な渾然一体の威力を全世界に今一度力強く誇示する壮大な絵巻であった。

国防委員長は幹部たちに、自分はメーデー・スタジアムで大マスゲーム・芸術公演『アリラン』の最終公演が行われた際、全ての出演者と観客が一様にスローガンを唱え、

熱烈に歓迎することを目の当たりにしながら、わが人民はなんと素晴らしい人民であるかを改めて実感した、以前の党創立55周年慶祝閲兵式と大衆パレードが行われた際にも、数十万の群衆が幹部壇に向かって感激に満ちて万歳を唱え、熱烈に歓呼する姿を見て、われわれは本当に素晴らしい人民をもっていると考えた、と切々と語った。

その日の歓呼が聞こえるかのようにしばらく黙っていた国防委員長は、幹部たちを見回しながら、「苦難の行軍」時期にわが人民は党を絶対的に支持した、彼らは満足に食べられずひもじい思いをしながらも、ひたすら党のみを信頼し従い、党と生死を共にしたとし、このように語をついだ。

——私は気骨が折れると思われるときには、党を絶対的に信頼し従う人民のためにより多くの仕事をすべきだという決心を固めています。全ての幹部は、党に限りなく忠実な人民のために献身的に奉仕しなければなりません。

人民服に秘められたいわれ

金日成主席は生前、常に詰襟服を好んで着た。人々はその衣服を人民服と呼んだ。

その洋服の呼び名には深いいわれがあった。

2003年4月のある日、金正日国防委員長は金日成主席の生涯について感慨深く振り返り、このように語った。

——私は、以前金日成同志は常に詰襟の人民服を着て人民の中に入って活動したのだから、これからは私が詰襟の人民服を着て人民に尽くすつもりである、これからは背広服を着て休息もとり、休み休み仕事をするようにと、金日成同志に何度も懇請しました。

主席を偲んで目がしらを熱くする幹部たちの心を推し量って、しばらく口を利かずにいた国防委員長は追憶にひたって語った。

——金日成同志が着ていた詰襟服を人民服と呼ぶのは、詰襟服の前部が「人」の字の模様になっているからである。解放直後、金日成同志と金正淑（キムジョンスク）女史は、万景台（マンギョンデ）革命学院の制服の袖にも人民の真の息子・娘になるようにという意味を込めて「人」の字の模様の赤い筋を付けるようにした。今、人民軍軍人の礼服の袖に付けた赤い

筋も同じ意味である。……

金日成同志はいつどこでも人民を敬い、大事にし、全てを人民と結び付けて活動した。わが党の革命的武力を正規軍に強化・発展させるときにも、軍隊を人民の利益を擁護する真の人民の軍隊にしなければならないとしてその名称を「朝鮮人民軍」とつけた。わが国には国家主権機関や経済文化機関をはじめ多くの機関や単位、対象の名称に「人民」という表現が入っているのが多い。全ての人がその深い意味を胸に刻み付け、人民が国の真の主人となっている社会主義祖国の富強・発展のために献身すべきである。……

寸分の隔たりもなく

2006年3月のある日、金正日国防委員長は三池淵(サムジヨン)郡（当時）の機関所在地に新しく建設されたペゲ（枕）峰そば屋を訪れた。

建設を受け持った幹部は国防委員長を案内しながら、どのように評価されるのかと緊張していた。

でも一方では、自分が見るにも非の打ち所がないようで、不合格にはならないだろうと自負していた。

彼の胸中で緊張と自負が交錯する中、まず1階の厨房を見て回った国防委員長は、立派に整えたと満足を表した。

みんなの顔が明るくなった。

ところが、国防委員長が大衆食堂に案内されたときであった。

食卓別に中仕切りがされたのを見た国防委員長は即座に、大衆食堂に中仕切りをすると、職級別にサービスする傾向が現れかねないと厳しく叱責した。

――わが国では身分制度を廃止して久しいのに、大衆食堂にまで中仕切りをして身分差別をしては人民に好まれません。育ちゆく新しい世代が食堂で職級別にサービスするのを見ると、悪い影響を受ける恐れがあります。私は職級別にサービスするのには反対します。

国防委員長は、自責の念に駆られている幹部たちに、過ちは正せばよいと言った後、雰囲気を変えようと愉快そうな口調でそば屋の支配人に聞いた。

——いつになったら冷麺が食べられますか。冷麺を作って招くとまた来ます。

今日は食糧切符を持ってこなかったが、その折には必ず食糧切符を持ってきます。

「将軍、きっとまたお出でになってください。そのときには冷麺をうまく作って差し上げます」

国防委員長は微笑み、そのときには自分も大衆食堂で食事をするつもりだと念を押した。

記念写真の背景

2007年8月のある日、金正日国防委員長は端川（タンチョン）製錬所を視察した。

製錬所の全景を眺めていた国防委員長は、端川製錬所がきちんと整備されているとたたえた。

瞬間、製錬所の幹部たちは企業所の昨日と今日の様子を改めて思い比べた。

「苦難の行軍」時期に電気、原料の不足によって製錬所の生産はほとんど中止状態で、設備も補修できなかったため、工場を少し稼働しても環境保護に重大な支障をきたしていた。

そんなとき、製錬所の実態を確かめた国防委員長は、公害を決定的になくすために製錬所を新世紀の要求に即して現代化するようにし、国情が困難を極めている中でも強力な建設陣と共に設備の現代化に必要な多額の資金を送った。

そうして、少し稼働しても有害ガスを放出していた製錬所の状況が、今になっては過ぎ去ったことになり、清澄な空気だけが溢れるようになった。製錬所の構内には動物舎まで整えられて各種の動物が増えるようになった。

改築以降、製錬所のガス放出量は国際環境保護機関が定

めた基準よりはるかに低かった。

製錬所地区に溢れる清新な空気、それは生産に先だって人民の健康をもっと大事にする金正日国防委員長の人間愛の賜物であった。ところが、国防委員長がむしろ自分たちをほめたたえてくれるので、幹部たちは目がしらを熱くした。

国防委員長はふと、並外れて高くそびえた製錬所の煙突を眺め、高さがどれほどなのかと尋ねた。そして煙突から視線を離せなかった。

いわれの深い煙突であった。

いつだったか、端川製錬所の建設現場を視察し、建設に関する貴重な助言を行っていた金日成主席は、煙突の高さを聞き、住民が公害を受ける恐れがあるから、煙突をもっと高くするようにした。そうして、煙突はもとより20メートルも高く建てられた。

国防委員長は長時間をかけて製錬所の各工程を具体的に見て回った。そして、全てのものが非の打ち所がなく、本当に立派である、どこに出しても遜色がないように企業所をよく整備した、有害ガスの臭いが全くしないと満足した。

そして、未完成の部分を残らず改造すべきである、例えて言えば、今はよい洋服を着たのに、それに合わせて肌着もよいものを着るべきだと笑顔で言った。

幹部たちは楽しい気持ちになった。

国防委員長は、端川製錬所を見てたいへん満足したとし、みんなで記念写真を撮ろうと言った。

幹部たちは喜びを隠しきれなかった。

国防委員長は、今日の撮影は自分が演出をする、何を背景にすればよかろうかと幹部たちに尋ねた。

製品の山を背景にするのがよいと思うという一幹部の返答に国防委員長は、それは写真によく写さないとし、焙焼炉の後ろの高い煙突を指した。

「あの煙突を背景に撮りましょう」

この前までその煙突から噴き出される黒い煙のため不便を感じていた製錬所地区の人民が、公害のない環境の下で住むようになったのが非常にうれしくて、煙突を記念写真の背景に選んだのである。

国防委員長は、最初は製錬所の幹部たちと共に、次は同行した幹部たちと共に煙突を背景にして写真を撮った。

2．最も尊敬する師

立派な母親

1957年8月のある日、金正日国防委員長は金日成主席に随行して現地指導に向かう途中、南浦（ナンポ）市江西（カンソ）区域台成（テソン）里のある選挙場に立ち寄った。

金日成主席は人民の限りない敬慕と感謝の情のこもった花束を受け、熱狂的に歓呼する有権者たちに温かく答礼した。

主席は受けた花束をある老婆に渡し、老人たちと談話を交わした。

このとき、思慮深い眼差しで主席を仰ぎ見ていた一人の老婆が進み出た。

戦争時期に敵と闘って戦死した人民軍連隊長の母親であった。

「首相！　お顔がとてもやつれていらっしゃるようですが、あまりご心配なさらないでください。分派分子らが人民生活がどうのこうのといくら騒ぎ立てても、今はみんな幸せに暮らせるようになりましたから大丈夫です。

なんといっても私たちが勝つに決まっています。分派分子らが勝つわけがありません。心配なさらないでください。私たちは首相を支持します」

金正日国防委員長は感動した面持ちで同行した幹部たちに、戦死した連隊長の母親が金日成同志に分派分子らの罪を

糾弾し、私たちは金日成同志を支持すると切々と申し上げたが、彼女のその言葉には、金日成同志を慈父として信頼し従おうとするわが人民の固い信念がこもっている、と語った。

そして、領袖は人民を信じ、人民はあくまで領袖に従おうとすることにわれわれの勝利の保証がある、わが人民は本当に立派な人民である、金日成同志の周りに固く団結したわが人民にかなう者はこの世にいない、と確信に満ちて強調した。

「本当にその通りです。連隊長の母親は戦争のとき3人の息子を前線に送り出しましたが、長男は戦死し、2人の息子は戦傷栄誉軍人になって戻ってきたそうです」

幹部の言葉を聞いた国防委員長はこう言った。

――立派な子どもの陰には立派な両親がいると言われています。戦死した連隊長の母親は本当に立派な母親です。農業協同組合がその家庭をよく見守るべきです。連隊長の息子を立派に育てて父の後を継ぐようにしなければなりません。

後日、金日成主席は機会ある度に、私はその老婆の言葉を聞いて新たな勇気を得、分派分子らを徹底的に粉砕しなければならないと考えたと、繰り返し回顧した。

朝鮮ではその後、その母親をモデルにした劇映画が制作された。

労働者と討議するべき

1975年の初め、朝鮮職業総同盟中央委員会の幹部たちは集団的討議を繰り返して、党創立30周年を迎えて行うべき膨大な活動計画を立て、作戦案も手ぬかりなく作成した。

国防委員長は1975年1月のある日、職総の一幹部に会った。

国防委員長は、労働者階級の代表が時間を少し割いてもらいたいと言っているのに、それに応じないわけにはいかない、おそらく労働者階級のためにまた何かよい仕事を計画したようだが、早く話を聞いてみようと促した。

幹部はその間自分たちが手間をかけて立てた活動計画を報告した。

それを注意深く聞いた国防委員長は、今回職総が計画した仕事は全て結構だとして次のように尋ねた。

「ところで、この計画を労働者たちと討議してみましたか」

予想外の質問に幹部の顔はこわばった。

国防委員長は、それは適切だとは言えないとし、次のような話を聞かせた。

——農村で稲が実る頃に倒伏する現象がしばしば現れた。

金日成同志は農業部門の幹部と科学者にこの問題を究

明して対策を講じるよう課題を与えた。しかし、この問題は容易に解決されず、年が替わっても繰り返された。一部の幹部は、稲が実ると稲株の上部に重さがかかり、そんなときに風雨にさらされれば稲株が倒伏するという見解を持っていた。

汗水流して丹念に育ててきた穀物の実がほとんど熟したのに、それを台無しにしてしまうとは残念なことであった。

金日成同志はこの問題一つを解決するためにも農村の道をたゆみなく歩み続けた。平野部の田にも足を運び、中間部、山間部の棚田も見て回り、早期に田植えを終えた田にも関心を払い、一番最後に田植えをした苗床の跡の作柄も確かめた。堆肥や肥料を施した状況も調べ、前年と当年の気象条件も比べてみた。

その日々、金日成同志は農業科学者はもちろん、協同農場の技術者、作業班長、分組長、はては用水管理工に至るまで一人一人会って話し合うことを鉄則としていた。

この過程に金日成同志は、平凡な農民たちの話から一つの問題点を見つけ出したが、稲の倒伏した所はいずれも窒素肥料を施し過ぎた水田だということであった。例えば、苗床は粘土質の場所に定めるが、もとよりそこには窒素成分が多い。そこに基肥をたくさん出し、そのうえに窒素肥料まで施したのだから、悪い結果になるのは当た

り前だった。結局、稲の倒伏する原因はここにあった。

国防委員長は話を終えてこう言った。

――どうですか、問題解決のカギは大衆の中にあります。

皆さんが立てたこの計画を持って労働者階級の中に入って意見を聞いてみなさい。

労働者階級の意向はすなわちわが党の意図であり、朝鮮革命の要求です。言い換えれば、わが党は労働者階級の意向通りに活動する党です。

この事実を伝え聞いた職総の幹部たちは、自分らの過ちを深く反省し、その足で事務室を離れて労働者階級の中に入った。

先生と相談せよ

1975年3月のある日、咸鏡（ハムギョン）北道を現地指導していた金正日国防委員長は、鏡城（キョンソン）郡の深い山奥のある農場にも足を運んだ。

農場の田畑の傍らで車を降りた国防委員長は、昨年の営農状況について尋ねた。

「実績がかんばしくありません。ヘクタール当たりトウモロコシを3.7トンしか収穫できませんでした。昨年、昌城（チャンソン）郡を現地指導していた金日成主席は、ここに来ている闘士同志に電話をかけて郡内のトウモロコシの作柄について確かめました」

郡党責任幹部の自責のこもった返答を聞いた国防委員長は、金日成同志は農業に対してあれほど気を使っておられる、われわれは農業に第一の関心を払わなければならないとし、周辺を見回した。

ところが、田畑には堆肥の山もあまり見当たらず、冬を越したトウモロコシの根株もそのまま残っていた。

国防委員長は、営農準備に力を入れていないようだ、トウモロコシの栄養ポット用の腐植土を田畑別に十分に用意し、日当たりがよい所に苗床の位置を定め、栄養ポットを適時に丹念に作らなければならない、と指摘した。

続けて、どんな作物を植えているのかを聞き取り、次のように強調した。

——農業を立派に営むためには、金日成同志が教えた通り適地適作の原則に基づいて作物配置をよくしなければなりません。郡では協同農場に、ある作物を植えろと一律に押し付けるのでなく、古くからの篤農たちと相談もし、田畑別、筆地別の土壌成分も具体的に分析したうえでそれに適当な作物を植えるようにすべきです。

幹部は、営農状況がかんばしくないことをもどかしく思って、農業の主人であり、担当者である篤農たちと相談しようとせず、時々ある作物を植えろと押し付けていた過去の活動態度を振り返り、自責の念に駆られて頭を上げることができなかった。

国防委員長は彼の気持ちを察したかのように、穀類と共に野菜も多く栽培しなければならないとし、地力を高める方途について一つ一つ説明した。

ついで、ここでも昌城郡のように山を利用して畜産を発展させなければならない、ここのような山間部の農場では幹部が仕事の手配さえよくすれば、羊、ヤギをはじめ草食家畜をたくさん飼って乳と食肉を十分自給自足できると述べた。

この問題もやはり、古くからの土着篤農たちの意見に耳を傾けなかった古い活動方法から生じたので、幹部はさらにうなだれた。

押し付けるのでなく、古くからの篤農たちとよく相談せよという国防委員長のこの言葉は、人民大衆は賢明な師、先生であり、彼らを奮起させれば不可能なことはないという革命の真理を分かり易く、平易に言い聞かせた意義深い教示であった。

幹部は「人民は先生である！」という言葉の意味を今さらのように噛みしめた。

誰を信じるべきか

黄海南道（ファンヘ）で製錬所を一つ建設していたが、難問があまりにも多くて思うように進んでいなかった。

道党責任幹部は方途を見出せず悩んでいた。

1976年8月のある日、彼は早急に結論を受けなければならない問題が提起されて金正日国防委員長を訪ねるようになった。

国防委員長は提起される問題について一つ一つ結論を与えたあと、今製錬所の建設はどのぐらい捗っているのか、難問が多いというので一度呼ぼうとしていたところだったと言った。

そうでなくても、不振状態にある製錬所の建設問題で常に苦心していた彼は、国防委員長に心配をかけたのが申し訳なくて頭を上げられなかった。

国防委員長は大様に笑い、初めての仕事なのにひとさじで腹がふくれるはずがない、工事が進められていない事情について具体的に話すようにと促した。

彼の話を注意深く聞いていた国防委員長は尋ねた。

「それで、労働者たちは何と言っていますか」

「労働者たちとは討議してみませんでした」

「労働者たちと話し合ってみなかったというのですか」

幹部たちも解決しがたい難問だから、労働者たちと討議してみたところで別に役立たないだろうと思っていたという彼の返答を聞いた国防委員長は慎重な面持ちでこう言った。

——金日成同志は、幹部は労働者階級から学び、彼らに依拠して全ての問題を解決すべきだと教えています。われわれが黄海製鉄連合企業所のオートメ化を実現し、殷栗（ウンリュル）鉱山に大型長距離ベルトコンベヤーを建設する際、労働者階級の力と知恵、忠誠の熱情を信じたので、あれほど困難かつ膨大な課題を成功裏に遂行することができました。難問を解決するためには労働者階級の中に入らなければなりません。

自責の念に駆られている幹部を見つめていた国防委員長は、懇ろに諭した。

——労働者階級の中に入って解決方途を見出さなければならない。労働者たちがやろうと思ったらできないこ

とはない。労働者階級を信じ、彼らに依拠すれば不可能なことはないだろう。こんなときであるほど、責任幹部の信念が肝心である。労働者階級の中に入って彼らに忠誠の信念、自力更生の信念を抱かせなければならない。忠誠の信念さえ強ければ、無から有を生み出すことができる。われわれは労働者階級を信じる。……

彼は姿勢を正し、労働者階級を信じ彼らと相談して難問を解決し、製錬所の建設を期限前に完了すると国防委員長に誓った。

人民が食べてみたあと

1977年6月のある日、平壌市党委員会の責任幹部は金正日国防委員長からの電話を受けた。

国防委員長はある製麺工場の生産状況について質問した。

その工場は、国防委員長が自ら手配をして朝鮮東海のある港から平壌まで設備を運んできて組み立てた工場であった。

責任幹部は、4月中旬に最初の麺を試作し、5月末には操業式を行ったとし、間もなく大量生産を開始する予定だと報告した。

「大量生産ですか……」

こうつぶやいた国防委員長はちょっと考えたあと、品評会を行って麺に対する市民の意見を聞いてみるべきだと言った。

責任幹部はえっと思い、返答をためらった。国防委員長は、人民が食べる麺だから人民が先に食べてみるべきじゃなかろうかとして、こう続けた。

――委員長や部長たちを万景台千席食堂のような所へ案内してさまざまの麺を5分ほどずつ煮て、これも試食しあれも試食してみるようにさせてから意見を聞くとよいでしょう。麺を小麦粉でも作り、トウモロコシ粉を混ぜても作って意見を聞くのです。居住人民班の班長たちも参加させて意見を聞いてみるのがよいでしょう。

責任幹部は興奮した語調で「わかりました」と答えた。

こうして万景台千席食堂では麺の品評会が行われ、当該部門の幹部と平壌市内の数百人の居住人民班長たちが招請された。

彼らは、さまざまの麺を試食し、一様にどれもみなおいしかった、麺がしこしこして歯ごたえがある、5分間煮るだけで食べられるのだから素晴しいと評した。

品評会の結果は直ちに国防委員長に報告された。

国防委員長は、人民が判断を下したのだから、即製麺は合格だと言い、報告書に合格と書き入れた。

即製麺はこのように、人民が食べてみてから大量生産に入るようになった。

労働者たちに表した敬意

2009年5月のある日、金正日国防委員長は検徳（コムドク）地区の各鉱山を現地指導した。

大興（テフン）青年鉱山（当時）を訪れ、一人の幹部から国の実情に即したマグネシアクリンカー生産工程の独自的な確立に成功したという報告を受けた国防委員長は、よくやりました、まさにそうすることがわれわれの方式であり、チュチェ工業なのです、と手放しで称賛した。

国防委員長は、耐火物生産のチュチェ化を立派に実現したのは一つの革命であり、わが国の工業の発展において大きな意義を持つ巨大な功績である、これは核実験の成功に劣らぬ大きな成果である、金日成同志が耐火物工業のチュチェ化に成功したことを、じかにお出でになってご覧なさったとしたら、どんなにお喜びなさるだろうか、と言った。

金日成主席は早くから、マグネシアクリンカーは「白金」も同然のものだとし、耐火物生産のチュチェ化のためにあらゆる労苦を尽くした。

主席の不滅の労苦の深い思い出にとらわれていた国防委員長は、再び語を継いだ。

――大興青年鉱山の労働者たちは、口先でなく実際の行動をもって金日成同志の革命思想、チュチェ思想を光り輝かせ

ており、その正当性と生命力をいかんなく世に実証した。大興青年鉱山の労働者たちは実に感心な人たちだ。……

恐縮している幹部たちに国防委員長は、耐火物の生産に参加した設計家、技術者、労働者たちはみな英雄だとし、実に驚くべき発言をした。

「大興青年鉱山を大興青年英雄鉱山と呼ぶことにしよう」

感激した幹部たちが感謝の言葉も選べずにいたとき、再び激動的な光景が繰り広げられた。

朝鮮式の耐火物の生産工程図を眺めていた国防委員長は、その前へさらに一歩近づいた。

工程図に目をこらし、大興青年鉱山の労働者たちが実に大きなことをやり遂げたと、今一度称賛した国防委員長は、こう言った。

――この場に労働者たちがいないため、彼らに敬意を表する思いで、私は、われわれの方式を表示したこの耐火物生産工程図に直接敬意を表します。

そして工程図の前に頭を下げた。一同はこみ上げる感激を抑え、一斉に拍手した。

長きにわたり、偉人や師のような人物を敬うときに用いてきた言葉が「敬意」であった。

労働者たちに表した敬意、それは人民を天と見なし、師として敬い、人民の力と知恵、才能を一番大事にする国防委員長ならではの出来事であった。

3．一番有力な存在

一番力の強いものは何か

将子山（チャンジャ）にとどまっている間、金正日国防委員長は毎日の日課を間違いなく守っていた。

1950年10月のある日。

約束した場所に友だちが集まって兵隊ごっこを始めようとしたとき、国防委員長は、戦争に勝つためには何が必要なのかと尋ねた。

「飛行機！」「戦車！」「大砲！」「軍艦！」……

子どもたちは先を争って大声で答えた。

国防委員長は、今度は戦争で一番力の強いものは何かと再び尋ねた。

「飛行機だ。飛行機は空を飛ぶのよ」

「いや、大砲だ。飛行機を撃ち落すから」

「戦車だ。戦車は大砲も何も一切押しつぶすのよ」

よく聞いてみると、兵隊ごっこで自分が受け持った兵種の武器が一番強いと言い張っていたのである。

国防委員長は飛行機が一番強いと主張する子に、飛行機をどこで誰が作るのかと尋ねた。

「工場で労働者たちが……」

国防委員長は、飛行機を作る労働者も人であり、空を飛

ぶ飛行士も人であるとし、戦車と大砲、軍艦が一番強いと言っていた子どもたちにそれを誰が扱い、誰が撃つのかとまた尋ねた。

「戦車兵」「砲兵」「海兵」と答えていた子どもたちは「おや、それはみな人だね！」と叫んだ。

国防委員長は彼らの言葉にうなずき、こう続けた。

——その通りだ。大砲、戦車、軍艦を作るのも人である。大砲を撃つのも人であり、戦車を操縦して高地に上り、軍艦を操縦して海を走るのも全て人である。

それでは、この世で一番力の強い存在はなんだろう？

「人間！」

このように問題を提起し、理路整然と啓発・誘導した国防委員長は、友だちにこの世で一番有力な存在は人間であるという貴重な真理を悟らせたのである。

国防委員長は言葉を続けた。

——君たちは戦争で一番力の強いものは飛行機や戦車、大砲だと言っていますが、私はそう考えていません。この世で一番力の強い存在は人間です。人なしには飛行機や戦車、大砲のようなものも作ることができません。

自分自身の力、人間の力が一番強いという誇りに満ちた子どもたちの顔は明るくなった。

みんなが英雄になれる

1973年11月のある日。

職総中央委員会のある責任幹部を呼んだ金正日国防委員長は、竜陽（リョンヤン）鉱山第7号掘削機小隊の全員に労働英雄称号を授与する準備を進めるよう課題を与えながらこう語った。

——竜陽鉱山の金山（クムサン）鉱区第7号掘削機小隊員はみんな英雄です。一人や二人ではなく、小隊全員が英雄です。第7号掘削機小隊員たちが発揮した闘争精神も英雄的であり、彼らが積み上げた功績も英雄的であるため、みんな英雄になれるのです。

英雄小隊の誕生に胸を躍らせるその幹部の脳裏には、数カ月前のことが思い浮かんだ。

竜陽鉱山に出張した彼は、そこで深い感動をさそう事実を目撃した。

除隊軍人で編成された第7号掘削機小隊員たちは集団的英雄主義を発揮して10年間、年間計画を期限前に完遂したばかりでなく、立ち後れた小隊に自分らの採掘場を譲り渡し、不備な採掘場を担当して集団的革新を起こしていた。

現地から戻ってきた彼は、すぐそのことを金正日国防委員長に報告した。

国防委員長は、一人や二人でもない小隊全員が英雄主義を発揮したのは立派なことである、自分の小隊だけでなく鉱山全体のためを思う彼らの集団主義精神は高貴なものである、これは、チュチェ思想が社会生活に全面的に具現されているわが国でのみ発揚されうる革命精神である、とすこぶる満足した。

そして、そのことを金日成主席に報告した。

そのしばらく後、再び当の幹部を呼んだ国防委員長は、金日成同志があれほど喜んでいる姿は久しぶりだったとし、次のように述べた。

——わが国の労働者階級がみなこのように準備されているなら革命は勝利したも同然である。竜陽鉱山の第7号掘削機小隊員たちは集団主義精神を高く発揮し、社会の全構成員をチュチェ思想の要求通りに改造する上で一つのモデルを創造した。

私は彼らがみんな英雄になれると思っているが、もし彼らがみんな英雄になって英雄小隊が生まれると、なんと素晴らしくめでたいことであろう。……

興奮を抑えきれずにいる幹部を眺め、国防委員長は語を継いだ。

——竜陽鉱山第7号掘削機小隊員の中には勤務年限の短い人たちもいるそうだが、それは英雄に推薦する上で

問題にならない。李寿福英雄は軍服務年限が長くて英雄になったのではない。人間が英雄になれる表徴は、戦闘に参加した回数や勤務年限にあるのではなく、彼が党と領袖、祖国と人民のための英雄的闘争精神を持っているか、その偉勲が英雄的なのかどうかにある。……今一度強調するが、われわれの時代の英雄は、特出した人や選ばれた人だけでなく、党と領袖、祖国と人民のために英雄的偉勲を立てた人なら誰でもなれる。わが党の懐で生活しているわが人民はみんな英雄になれるのだ。……

その後、竜陽鉱山金山坑の第7号掘削機小隊長には二重労働英雄称号が、小隊全員には労働英雄称号が授与された。

信頼と報恩の結晶体

1984年5月のある日、咸鏡北道に対する現地指導を終えた金正日国防委員長は直ちに竜城機械連合企業所に向かった。

日程にもないこの企業所の訪問には深い理由があった。

金策（キムチェク）製鉄連合企業所を現地で指導していたとき、国防委員長は冷間圧延ロールが満足に供給されていないため、圧延鋼材の生産が伸び悩んでいる様子を目撃した。

企業所の幹部たちと協議してみると、彼らは口をそろえて冷間圧延ロールを作るには1万トンプレスが必要だが、朝鮮にはそれがないのでやむを得ず輸入するしかないと主張した。

しかし、国防委員長はそう思わなかった。

1万トンプレスが必要なら、国内で製作すればよいではないか。

国防委員長は竜城機械連合企業所の労働者たちに思いをはせた。

彼らはすぐる年代に3000トンプレスと8メートルターニングミル、6000トンプレスを立派に製作したのである。

それで国防委員長は竜城の労働者たちを信じて竜城を訪れたのである。

国防委員長はプレス職場へ直行した。

思いがけなく国防委員長を迎えて喜びに溢れていた工場の幹部たちは、現在、6000トンプレスに必要な部品の素材を加工していると説明し、工場では2台の6000トンプレスの製作を計画していると誇らしげに言い足した。

しばらく考えにふけって現場を行きつ戻りつしていた国防委員長は、以前には3000トンプレスや6000トンプレスだけをもっても人民経済の各部門に必要な素材を作って供給することができたが、今は国の経済規模が大きくなったので1万トンプレスがなくてはならない、それであなたたちを訪ねてきた、と言った。

それもそのはず、1万トンプレスと言えば、高さは10階建てのアパートぐらいで、部品は全部で約3070種、約7万200個にのぼる。一番小さいとされる本体の柱のナット一つがトラック1台分の積載量である。この特大型の設備を幾つかのボタンで操作できるように完全にオートメ化するためには、おびただしい技術上の問題を解決しなければならなかった。それゆえ当時、1万トンプレスを製作する国は世界的にも数カ国しかなかった。

そのような大型プレスを竜城機械連合企業所が作らなければならないのである。

国防委員長は、金策製鉄連合企業所の実態と冷間圧延ロールの必要性について切々と話した。

企業所の幹部たちは即座に党の要求を把握した。

国防委員長は単刀直入に聞いた。

——竜城機械連合企業所で1万トンプレスを作れますか。

「将軍、きっと作り上げます」

——竜城機械連合企業所では来年の党創立40周年を迎えて1万トンプレスを贈り物として作るべきです。

「わかりました」

いささかのためらいもない自信に満ちた工場の幹部たちの返答に、随員たちは唖然とした。

党創立40周年記念日までは1年余りしか残っていないのに、果たしてこの企業所が期限内にそれを作れるのだろうか。万が一それに成功したとすれば、それは奇跡中の奇跡である。

国防委員長は、特にすぐれた自力更生の気質をもっている竜城の労働者たちの忠実性と技術、胆力と気骨を信じ、そのような奇跡は確実に起こるものと確信したのである。

国防委員長は竜城で1万トンプレスを作るのは素晴らしいことだとし、その製作に関するいろいろな問題について工場の幹部たちと意見を交わした。

そして、工場を後にするとき、工場の幹部たちに拳を高く振って見せ、竜城機械連合企業所は有力な企業だと再び励ました。

国防委員長が植えつけた信頼の火種はまたたく間に燃え広がり、竜城機械連合企業所は党創立40周年記念日以前に1万トンプレスを作り出した。

西海閘門の建設に劣らない

わが国の史上初めて朝鮮東海岸に大規模の塩田が作られて生産を始めた。

1999年10月、完工したある製塩所を視察した金正日国防委員長は、困難を極めた「苦難の行軍」、強行軍時期に咸鏡南道の人民が建設した壮大な創造物を見て、深い感動を示した。

「本当に素晴らしいです！……」

国防委員長は、製塩所の堤防が実に膨大である、咸鏡南道では塩田を建設しながら堤防を築いて海をせき止めたわけだ、地区内工事も満足に行われた、生産された塩を水路を利用して小舟で運ぶようにしたのも結構だ、と終始笑顔を絶やさなかった。

「金野江(クムヤ)と徳池江(トクチ)が海に流れ込む湾内に堤防を築いて塩田を作りましたが、位置が妙であり、素敵です」

そして幹部たちにこのように語った。

——塩田を作るのは容易なことではない。ことさら骨の折れる工事だ。塩田を作るためには堤防を築き、段々式に地区内工事を行い、砂成分の多い地には泥と粘土を運んで均して固めなければならない。塩田を建設しながら築いた

堤防が30余キロであり、処理した土量は数百万立方メートル、堤防に張った石も数十万立方メートルであれば、大したものだ。そんなに多くの土量と石をほとんど背負って運んだそうだが、塩田の建設に参加した咸鏡南道民の闘志と精神が立派だ。咸鏡南道で実に大きなことをやり遂げた。……

咸鏡南道でこのように膨大な大自然改造事業を道自体の力でやり遂げたのは西海閘門の建設に劣らないことだ。これを見ると、自力更生の革命精神が非常に強いということが分かる。「苦難の行軍」、強行軍の厳しい時期に数万トン能力の近代的な製塩所を建設したのは、わが党の歴史に記録すべき誇り高い成果である。……

国防委員長は、朝鮮のことわざに「苦あれば楽あり」という言葉があるが、咸鏡南道のように自然を改造するための闘争を力強く展開し、大いに頑張れば何うらやむことなく幸せに暮らせる日が必ずやって来ると言い、こう続けた。

「帝国主義反動勢力の孤立・圧殺策動とひどい自然災害の中で不足するものが多く、困難な状況の下でも咸鏡南道の人民が決死の覚悟を持って奮闘した結果、このように素晴らしい創造物を生み出すことができました。われわれが刻苦奮闘しながら『苦難の行軍』、強行軍をした甲斐があります」

このように製塩所の建設者と咸鏡南道の幹部たちは最上の光栄に浴した。

英雄的な男

2000年11月のある日、金正日国防委員長は定平(チョンピョン)郡にある金津江(クムジン)のダム建設場を視察した。

みぞれ交じりの雨に打たれながら建設場を訪れた国防委員長は、ダムの上の建設場全景図の前で足を止めた。

農民タイプの郡党責任幹部が、国防委員長にダムについて詳しく説明した。

数千年の間無益に流れていた金津江をせき止めて電気を生産し、灌漑用水に充てるばかりでなく、水害も防ぐようになったダムは実に壮大なものだった。

ダムの残りの区間を全部築くと、ダム工事に使った土量だけでも60万立方メートルになるという郡党責任幹部の説明に、国防委員長は驚くような面持ちであった。

国防委員長は、今や大いに宣伝をしよう、大きな事を成し遂げたあなたたちを全国に自慢したいものだとしてこう付け加えた。

「かつては定平の人々を指して『チャドゥラギ（性格などが歪められた人）』と言いましたが、今回に来てみると、皆仕事熱心な人たちです。私は定平郡で陰日なたなく大きな事を成し遂げていることを大変満足に思います」

続けて国防委員長は、国に有益な大掛かりの仕事をやっているのだから、国家が援助しなければならない、輸送機材が不足しているとのことだが、称賛ばかりせずに難問を解決してやらなければならない、と言い、10トン積み大型トラック10台を提供するよう指示した。そして、ちょっと考えて、いや、それだけでは足りないようだ、ここにトラクターを10台提供し、掘削機も与えなければならない、と言い、その場でネックとなっていた問題を全部解決してやった。

「将軍、本当にありがとうございます」

大きな喜びにひたっている責任幹部を満足げに眺めていた国防委員長はふと、工事中に「鈍な奴が虎を捕る」と言われたのは事実なのかと聞いた。

豪放な性格の責任幹部は、ダム工事を進めながら難関も多かったが、あれこれと陰口をたたかれたときも一度や二度ではなかった。

食事もままならない困難なときに郡自体であんな大工事を始めるなんて途轍もないことだ、「鈍な奴が虎を捕る」ということわざのように責任幹部は愚かもので、功名主義者に違いない。……

これら全てが事実であることを知った国防委員長は、相変わらず微笑を浮かべてこう言った。

「このダム工事について一部の人たちは、『鈍な奴が

虎を捕る』と言ったそうですが、そう見るべきではありません。なんの見積もりもなく、むやみに大掛かりな仕事を展開する人が愚かものです。このダムは科学的な設計と計算に基づいて建設するものです。『鈍な奴が虎を捕る』と言ったのは、あまりにも大きな仕事を郡自体の力でやろうとしたという意味でしょう」

国防委員長は、このような大工事を郡の独自の力で完成するために取り組んだのを見ると、定平郡の人たちは度胸があると重ねて高く評価した。

その日の夕方、道党の責任幹部から定平郡党責任書記に対する詳細な報告を受けた国防委員長は、彼があれほど大きな工事を郡の力でやり遂げることを決心して取り組んだのを見ると太っ腹な人だとし、こう述べた。

「彼は英雄的な男です」

こうして、愚直な性格の持ち主だとことわざにまで例えられていた郡党責任幹部は、英雄的な男、大胆かつ度胸ある幹部として全国に知られるようになった。

革命と同志

2004年4月のある日、金正日国防委員長は幹部たちと席を共にし、革命的同志愛について話した。

国防委員長は、自身が党中央委員会で活動を開始してからもう40周年になろうとしている、数々の追憶の中で一番感慨深く思い出されるのは革命同志に対する追憶だと言った。

——革命を勝利に向けて前進させるためには同志が多くなければならない。同志は、思想と志を共にし、運命を共にする戦友である。同志なしには革命を切り開くことも、前進させることもできない。……

国防委員長は宣言するかのように力を込めて言った。

「そういう意味で革命はすなわち同志であり、同志はすなわち革命だと言えます」

国防委員長は、興奮を抑えきれずにいる幹部たちに向かって言った。

——金亨稷（キムヒョンジク）先生は、金日成同志が幼いとき、店に連れていって誕生祝いとして懐中時計を買って上げながら「成柱トンム(同志)、おめでとう」と言ったそうだ。金亨稷先生が金日成同志を「トンム」と呼んだことを見ると、父子間の血縁的関係を超越して金日成同志を革命

同志と見なしたことが分かる。それで金日成同志は、父から「トンム」と呼ばれたことを、革命家になって日本帝国主義侵略者と戦い、必ず奪われた国を取り戻せという意味であると解し、胸に刻み付けたと述べていた。

金日成同志も生前、私を革命の同志として接していたし、私も常に自らを金日成同志に従う革命戦士、同志と見なしてきた。

国防委員長の言葉は、同志の貴さから同志愛へと深化していった。

——革命の道で同志の間に行き交う愛がほかならぬ革命的同志愛なのだ。革命的同志愛は、同志への絶対的な信頼であり、同志のために全てを尽くす自己犠牲の精神であり、同志への限りない献身である。思想と志、闘争の目的の共通性に基づいているがゆえに、革命的同志愛はいかなる肉親の愛情や友情よりも深く熱烈な思想・感情であり、人間愛の頂点であり、最高峰であり得るのである。……

国防委員長は、想念に沈んでいる幹部たちに、同志間の愛はすなわち団結であり、革命的同志愛によって結ばれた力ほど強いものはない、革命的同志愛は一心団結の基礎であり、わが党の精神力、朝鮮革命の推進力である、と述べた。

そして、金日成同志が抗日の血戦万里の道をかき分けな

がら気高い同志愛の歴史をつづってきたことを感銘深く振り返り、語をついだ。

「革命は同志を得ることから始まるという真理は、私が先代から受け継いだ貴い遺産です。私はこの遺産を大事にし、革命の同志をこよなく愛し、私自身を信じるがごとく信じています。同志がいるからこそ金正日もおり、同志がいなければ金正日もいないというのが私の思想的信条であり、私はすなわちあなたであり、あなたはすなわち私であるという同志への信頼、これが私の同志観です」

「岩下老仏」が不屈の闘士に

2009年1月のある日、金正日国防委員長は険しい馬息嶺（マシク）を越えて新設の元山（ウォンサン）青年発電所を訪れた。

切り立った崖に沿って幾本も延びた一抱えほどの耐圧鉄管路とフル稼働している第1号、第2号発電所の外部と内部を長時間にわたって見て回った国防委員長は大いに満足した。

――江原道（カンウォン）では、元山青年発電所を建設しながら原子爆弾より威力のある精神力を発揮しました。江原道民が党から与えられた無限大の精神力をもって膨大な発電所建設を短期間に終えましたが、江原道民の精神力は大したものです。元山青年発電所は江原道民の精神力の所産であり、その結晶体です。……

国防委員長は、記念碑的建造物を打ち建てた功労をそのまま江原道民に譲り渡して語を継いだ。

――江原道民は血のにじむ悪戦苦闘をして無から有を生み出した自力更生の先駆者であり、不屈の闘士である。道内の幹部と人民が発電所建設の過程を通じて高い精神力の所有者、自力更生の先駆者になったのだから、これより大きく、貴重な財産がどこにあろうか。本当に江原道がうらやましい。……

そして、実際は国家が発電所建設を別に援助したことがない、江原道が自力で発電所を建設したことを高く評価し感謝を送る、と言った。

身に余る称賛にいたく感動した道の責任幹部は、昔から江原道の人々は「岩下老仏」と言われたが、今はその不名誉をすすぐときが来たようだと言った。

「岩下老仏」とは、岩の下に座っている年老いた僧侶、言いかえれば、なんの役にも立たない無気力な存在を意味する言葉である。

国防委員長は声を立てて笑い、以前は江原道民を指して「岩下老仏」と言ったが、今やそれが合わないものになった、中央や他の道の幹部たちもここに来てみれば、誰もが江原道の幹部たちの仕事ぶりに感嘆するだろう、元山青年発電所を参観させて、江原道が発電所建設の過程に得た闘争経験と教訓、自力更生の革命精神と革命的な活動方法、活動態度を見習うようにすべきだ、と言った。

かつて「岩下老仏」と呼ばれていた江原道の人々は社会主義朝鮮の不屈の闘士になった。

田畑は海へ延びる

2010年7月のある日、金正日国防委員長は完工した大渓（テゲ）島干拓地を視察した。

金日成主席と金正日国防委員長の大自然改造構想と発起によって塩州（ヨムジュ）郡と鉄山（チョルサン）郡の沖合いをせき止めて建設した大渓島干拓地は、それまで朝鮮に建設された干拓地の中で一番大きな干拓地である。

国防委員長は、一つの郡の耕地面積に匹敵する干拓地を眺めながら言った。

——西海の外海をせき止めて建設された大渓島干拓地は、労働党時代の偉大な記念碑的建造物である。大渓島干拓地が完工したことで、全世界にチュチェ朝鮮でどんな奇跡が起きているかをはっきり示し、チュチェ朝鮮は決心すれば無条件やり遂げるという鉄の真理を実践をもって証明した。……

国防委員長の力強い声が海岸に響き渡った。

工事が始まった当初、少なからぬ人々は以前に決壊した防潮堤を再び築くことは絶対に不可能だと主張し、たとえ決壊した防潮堤を再度築くとしても、数十年がかかるかも知れないと後ずさりした。

しかし、国防委員長が決心すれば、それはすなわち勝利であるという信念を固めた建設者たちは、数十年を要すると言われていた工事を数年の間に完成する奇跡を生み出した。

その日々、国防委員長は二回も工事現場を訪れて干拓地建設の設計図を示し、建設者たちの闘争を鼓舞した。

建設者たちは工事完工の日に再会しようとした国防委員長の約束を胸に刻み、立ちはだかる障害と困難を自力で乗り越えた。

干拓地の建設に秘められている建設者たちの偉勲とその苦労を推し量った国防委員長は、大渓島干拓地には建設者たちの英雄的偉勲と愛国心がこもっていると語った。

国防委員長は、「党が決心すればわれわれは実行する！」というスローガンを刻んだ構造物に視線を止めた。

仕上げ工事の区間に立てられた構造物であった。

しばらくの間、スローガンを眺めていた国防委員長は言った。

「『党が決心すればわれわれは実行する！』というスローガンは1980年代に人民軍が掲げたものですが、今は『朝鮮は決心すれば実行する！』という新しいスローガンを掲げるべきです」

国防委員長は、果てしなく広がった干拓地を眺めながら、大渓島干拓地は見れば見るほど実に素晴らしいとしか

言いようがない、大渓島干拓地の建設工事はある意味では西海閘門の建設より大きな工事だと言える、完工した大渓島干拓地を見ると、西海閘門を建設したときよりもいっそう感無量である、と言い、改めて建設者たちの偉勲を高く評価した。

——今回、平安北道（ピョンアン）で大渓島干拓地の建設を完工することによって、わが党代表者会に贈る誇らしい勤労の贈り物を準備した、党代表者会に贈る贈り物の中で、これ以上偉大かつ立派な贈り物はないだろう。

大渓島干拓地建設を立派に完工した平安北道干拓地建設連合企業所の従業員とその家族、支援者に特別感謝を送る。彼らが金日成同志の子孫らしく立派に働いた。これが大渓島干拓地建設者に対する私の総体的な評価である。……

国防委員長は、平安北道干拓地建設連合企業所に金日成勲章を、大渓島干拓地設計図には金日成賞を授与することを提議した。

金正日国防委員長の人民観

執　筆：副教授・博士　李誠心
編　集：鄭英玉、松真成
翻　訳：李鮮日
発　行：朝鮮民主主義人民共和国
　　　　外国文出版社
発行日：チュチェ113(2024)年9月

ㄱ-240880196663

E-mail: flph@star-co.net.kp
http://www.korean-books.com.kp



ISBN 978-9946-0-2372-4

9 789946 023724 >